

---

## 詩歌・小説の中のはきもの（第3回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

---

26 選んで、買って、はい、さようなら、はこの店では通用しない。客は自分の足を後世に残すことになるのである。よって、初めて訪れた場合の所要時間は最低でも一時間。好みや希望を述べて相手が眉を吊り上げた場合には、もっとかかるだろう。けれどもそれはまだ先へ行ってからの話。まずこの（入店）式の付き添いを務めてくれる案内役と顔を合わせねばならない。月並みな店では彼はシューフィッター、もしくは販売主任などと呼ばれている。けれどもこの店は後期ヴィクトリア様式バロック風イギリス人の最後の砦であるので、彼自身は“御用商人”という名称のほうを好むかもしれない。

ピーター・メール

★『贅沢の探求』の「紳士のこだわり」から。今、4万から6万円の高級靴が売れている。売って、はい、さようなら、にならないような態勢は出来ているのだろうか。どんな商品でも次に買いに行ったらもう店員も替わり、品揃えもガラッと変って、暗に使い捨てを促すようでは、商品が長く売れ続くことはない。難しいことだろうが日本にも、ロンドンに2、3軒あるというこんな“入店式”から始まる、“御用商人”のたむろしている“砦”のような、顧客と靴を大切に作る店が欲しいものだ。

27 己らだって最少し経てば大人になるのだ。蒲田屋の旦那のやうに角袖外套か何か着てね、祖母さんが仕舞つて置く金時計を貰つて、そして指輪もこしらへて、巻煙草も吸つて、履く物は何が宜からうな、己らは下駄より雪駄が好きだから、三枚裏にして縹珍の鼻緒といふのを履くよ、……

樋口一葉

★明治29年に発表された『たけくらべ』から。終生お金に苦しんだ一葉が、紙幣に登場するというのも皮肉な話だ。この作品に登場する履物を列挙すると、突かけ草履、ぬり木履、革緒の雪駄、下駄、足袋はだし、草履、雪駄、泥草履、足駄である。喧嘩騒ぎに駆けつける交番の巡査は、単なる「靴音」で表現されている。今はなんでもない靴音が、当時の下町ではある人にはハイカラに、ある人にはその音を耳にただけで、緊張を強いるものだったのだろう。

28 梅咲きやしなのゝおくも草履道

小林一茶

★「草履道」、いい言葉である。春、雪が解けて乾いてきた道のことを昔の人はそう呼んだ。糸魚川で暮らした相馬御風作詞の童謡「赤い鼻緒の じょじょはいて おんもに出たいと 待っている」には、歩きは

じめたばかりのみいちゃんだけではなく、春を待ちわびていた大人の気持ちも詠みこまれていたのである。「じょじょ」というのは「草履」の幼児語。「草履道」は大人の喜びも含んでいる明るい語感を持った雪国の言葉なのだ。

29 大臣の身に藁沓はゞきを着して、長途を歩まありたる、ありがたき事也と、心中に思はれて、ちとまどろまれたる夢に、御殿より高僧出給て、仰られけるは、「大臣の身にて、わら沓はゞきしてまゐる、ありがたき事に思はるゝ事、此山のならひは院・宮みなこの禮なり。あながちに獨思はるべきことかは。・・・」とおほせらるゝと見給て、さめにけり。

★『古今著聞集』の「徳大寺實能熊野詣の事」から。大臣の身で藁沓わらぐつをはいて歩いてきたことを自慢して寝た夜の夢に、高僧が出て「熊野詣のならいは上皇や親王でも皆この礼をとるのだ。何も自慢することではない」と言ったというのである。熊野のすばらしいのは誰にも参詣を許したこと。つまり障害者にも門戸を開いていたし、女人禁制でもなかったのである。履物にも身分の差別がなかったことが分る。

30 冬は魚皮靴（チェブ・ケリ）や、鹿皮靴（ユク・ケリ）をはいた。魚皮は川に入った雄鮭の皮を底にし、頭のほうを爪先にして背鱗をすべり止めにした。甲のほうはいとうとかあめますの皮をとっておいて使った。鹿皮は後脚の脛の皮を底にして、飛節のところを踵になるようにし、爪先を二つに割って、甲にした前脚の皮の毛を、底の毛と逆にして割れ目

に縫い込み、やはりすべり止めとした。

更科源蔵

★『更科源蔵アイヌ関係著作集 Ⅲ』から。「雪よ 岩よ われらがやどり」で始まる『雪山賛歌』の2番に「シールはずしてパイプのけむり」という一節がある。シールというのはアザラシの毛皮で、スキー板の下に付ける。これを着用すると、急な新雪の斜面を登るときは毛が逆立って真っ直ぐに造作なく上れるし、滑降するときには毛が寝て、そのまま滑らかに滑り下りることができる便利なものだ。アイヌは勿論、昔の人は他の動物と「共生」していたのである。

31 素足で下駄ばきで育ったせか、私は靴下にも靴にもなじめない。このごろはウォーキングシューズやスニーカーもあって皮靴で拘束される不快をいくぶん軽減してくれるけれども、ほんとうはまるごと裸足で歩きたい。冬はともかくとして、春から秋までは、ことに夏は、町を裸足で歩きたい。日に焼けた熱い道を踏むのも、日陰のひんやりする道を踏むのもいい。

高田 宏

★『旅・忘れ残り』の「裸足の町」から。著者も書いているが、あの物価の高い、観光地として手垢のついた感じのあるワイキキで一番楽しかったのは、裸足で歩くことができたことだった。たくさんのアメリカ人が裸足で歩いている。『バカの壁』で知られた養老孟司によれば、靴を履くのは「自然性の統御」で社会的強制なのだという。九州か沖縄あたりの観光地で「裸足の町」をウリにしてくれれば、多くの観光客が集まるだろう。

32 女は、こっちの部屋からあっちの部屋へと、スリッパを引きずり、鼻歌をうたいながら、行ったり来たりしていた。彼は、茶碗から目を上げなかった。だが、女がそばを通ったとき、見るともなしに、ちょうど目の高さのところを、きゃしゃな、血管の透いてみえる裸の足、それにまた、スリッパにはいりきらない赤いかかどが、黄色っぽいゆかの上をすべって行くのを見た。パンが、ぐっとのどにつまった。

ロジェ・マルタン・デュ・ガール

★『チボールの家の人々』から。西洋の人は素足にならないし、ましてや他人に自分の素足を見せたがらない。少年ジャックがパンを喉に詰まらせても不思議はないのだ。つい最近まで素足の美しさについては日本人もかなり敏感だったが、「ナマアシ」などと言い始めてからお色気は消し飛んでしまった。「裸足」との違いを言えない人もだんだん増えつつある。

「素足とふ日本語消えて生足と若きら言ひてサンダルを履く 岡部夏子」と歌人は嘆いている。

33 もうすこし老いて、いよいよ足が弱ったら、いったいどんな靴をはけばよいのだろう。私もこのごろはそんなことを考えるようになった。老人がはく靴の伝統は、まだこの国にはない。その年齢になってもまだ、靴をあつらえるだけの仕事ができるようだったら、私もユルスナールみたいに横でぱちんととめる、小学生みたいな、やわらかい革の靴をはきたい。

須賀敦子

★『ユルスナールの靴』から。ユルスナー

ルはイタリアの作家。自分自身年老いて、その上足の骨折を経験してみると、日本には年寄りのためのいい革靴が少なすぎると思う。骨折をいい機会として、この際調べてみようと、いくつかのデパートや大型専門店へ行って見たが、須賀さんの言う通り。老いる前に亡くなってしまった須賀さんは、終生いい靴に恵まれなかった。こんなにも高齢化が騒がれているのに、靴屋さんはどっちを向いて、何を見ているのだろう。

34 靴 いまは新品を作るのは機械の仕事になっている。機械さえあれば、高度な技術がなくともモノが作れてしまう。そうしたなかで、物を修理するという仕事には、昔ながらのモノづくりの精神が継承されている。手仕事で一つひとつ直してゆく修理の仕事にこそ、製品を作る技術や職人の精神が受け継がれている。登山靴 靴を修理することで、世界中のさまざまな登山靴づくりの技術について知ることができる。つまり、修理によって得られた技術がまた新品の靴作りにも活かされると中さんは話す。靴の修理と靴作りは、いわば車の両輪なのである。

足立紀尚

★『修理 仏像からパイプオルガンまで』から。製造工程が細分化された大手機械靴メーカーから「職人」が消えてゆく。職人が消えれば「職人の精神」も失われてしまう。この本には32職種が紹介されているが、精神の吹き込まれたモノというものの素晴らしさを教えてくれる。単なるモノとしての靴づくりを生涯の仕事にしたい人などいないのだ。消されてしまう「職人」は哀れだ。

### 35 足を忘れる 莊子

足のことを忘れる。足のことが気にならない。意識しない自然のままの状態のこと。

莊子は意識しない自然のままの状態こそ最も快適であるとした。足の存在を忘れさせる靴が最もよい靴なのである。こう考えると、快適か快適でないかということ意識しない状態こそ最も快適だということになるのである。

★『故事成語名言大辞典』から。恩師が製靴会社に私を紹介するに当って、入社試験での想定口頭試問をして下さった。その中の一つに「“よい靴”の定義を述べよ」というのがあった。「丈夫で長持ちする靴」「費用効果のよい、つまり品質がよく値段の安い靴」「老いも若きも履ける（つまり親子共用できる）靴」「手入れしなくてもよい靴」「靴ずれのおきない靴」と並べ立てて行くと、先生の模範解答は「履いているか履いていないか、擦り減っているかないか、そんなことを一切持主に考えさせない靴」だと言って笑った。因に先生が「僕はソージが好きだ」と仰しゃったとき、私は「掃除」と聞いて腑に落ちなかった。古い世代の人は莊子を「ソウジ」と読むことを知らなかったのである。

### 36 朝寒やしつかと結ぶ靴の紐

豊島楨生

履きやすき靴得て秋の旅に出る

永野ちづ子

★『NHK俳壇』から。このような句を読むと、紐靴はいいなあと思う。生活の区切り、気持ちの転機機能をもっている。意識してはいないが、靴に信頼感を持って

いる。昨日の澱<sup>おり</sup>を身中に溜めたまま、玄関に口を開けて並んだスリッポンに足を突っ込んでしまうなどというのは、生活に疲れきった人のすることだ。二句目は、履きやすい靴を得たから、それで旅に出る気になったわけではなさそうだが、靴は出発の前から気心の知れた仲間のようになっている。

37 鉄とゴムの製造・加工技術は近代スポーツの発展にとって決定的な役割をしたとあってよい。・・・

第一に、ゴムはボールに革命をもたらした。・・・

第二に、ゴム底のシューズの開発がある。それまではすべて革底のシューズを履いてスポーツが行われていた。鉄の鋏を打ったスパイク・シューズはその時代の名残りである。ゴム底のシューズは芝、クレイ、板、コンクリート、などグラウンド（コート）の床面にあわせてあるいはテニスやバスケットのように競技種目の特性にあわせて、最も具合のいいシューズを工夫・改良し、大量生産することを可能にした。

★『図説スポーツ史 寒川恒夫編』から。スポーツの歴史を書いた文献には靴の記述がほとんど現われない。その意味では貴重な記述であるが、底材に限っても古い時代で終わっている。革底（天然の動物性素材）→ゴム底（天然の植物性素材）→合成底（化学性素材）と推移し、現在はポリウレタンの化学素材が全盛の時代になっている。アテネオリンピックの女子マラソンの勝者野口みずきがゴールインして靴にキスしたのは、嬉しいことだった。日本は謙虚なゴールドメダリストを持った。